

## 鹿角における農業形態

生物資源科学部 アグリビジネス学科  
2年 畠山 英子

指導教員 生物資源科学部 アグリビジネス学科  
教授 岡田 直樹

### 1. 研究の背景・目的

本研究の当初の目的は、鹿角市の農業の構造や農家間の連携について学び、そこから持続的な農業の姿を考えることであった。しかし、アプローチの方法を考える中で、農業のあり方の前提として、今日、農家の人は農業をどのように意識しているのか、知りたいと思うようになった。高学歴化が進み子弟の多くが実家を離れて大学に進む、農家戸数の減少のもとで農家に嫁ぐ女性の多くは非農家出身になる。このもとで、従来と異なる意識が生まれ、農業のスタイルも変化するのではないか。こうしたことから、本調査では、年代ごとの農家の意識—特に女性に注目し—を知ることで、それがどのような営農スタイルの選択につながるのかを考察することを目的とした。

### 2. 研究方法

調査方法：訪問による聞き取り調査。調査者は自分1名。1回の調査は1時間程度。

調査対象：鹿角市内の農家17戸。経営主が既婚で、経営主が30～60代の農家（各年代3～6戸）。農家の選定は、鹿角市役所に依頼した。

調査項目：①家族状況（子供の有無、妻は農家・非農家出身か、結婚に至る経緯等）

②農業経営の形態（経営規模、作付作物）

③農業に対する考え方（結婚前の農業のイメージ、農業の大変なところや困っている点、農業の楽しいところ、農業を選択した理由）

④家庭内の意思決定状況他（誰が意思決定権を持つか等）

### 3. 分析結果

#### 1) 家族状況

家族状況について、Q1. 夫婦それぞれの実家は農家か、Q2. 結婚の経緯や出会いの場所はどうか、整理した。ここでは、次の傾向がみられた（表1）。

- ・男性は、新規参入の40代1名をのぞけば、実家は農家である。すなわち、農作業体験があり、多くは実家の農業経営を継承している。
- ・女性は、50～60代で農家出身者の割合が高く、30～40代は過半数が非農家出身者である。
- ・結婚の経緯では、50～60代は、出会いの場が、友達・知人の紹介、同級生等、身近が多い傾向にあった。一方、30～40代は、大学など、出会いの場が遠隔化する傾向がみられた。

以上のことは、次を意味するとみられた。

①農業経営は依然として男性子弟により継承されている。この点、女性より、職業選択の自由度は低いかもしれない。男性は、農作業経験を持ち、農業は比較的身近にあった。

②50代以上の女性は、実家が農家で、かつ近隣出身者が多い。すなわち、農業・農村がどのようなものか、結婚前から知る傾向にある。一方、30～40代では、農家出身者の割合は下がり、また、出会いの場が遠隔となる場合もあった。すなわち、この年代の女性は、農業や、場合によって鹿角市の農村の状況を十分知らないで結婚した人もいるとみられた。

#### 2) 選択されている農業経営の形態

次に、どのような農業経営形態がとられているか、Q3. 専・兼業の別、Q4. 夫の農業従事、Q5. 妻の農業従事、Q6. 経営規模、Q7. 主要作物を整理した。ここでは、次がみられた（表2）。

表1 家族状況

	農家番号	回答者	Q1.実家は農家か(夫/妻)	Q2.結婚の経緯・場所		農家番号	回答者	Q1.実家は農家か(夫/妻)	Q2.結婚の経緯・場所
30代	30-①	男	○/?	会社	50代	50-①	男	○/○	サラリーマン時代
	30-②	女	○/○	大学時のアルバイト先		50-②	男	○/○	市役所の向かいで働いていた
	30-③	女	○/×	東京で		50-③	男	○/○	友達の紹介
40代	40-①	男	○/×	合コンで同じ職場だと気づき		50-④	男	○/○ (妻の実家は離農)	知人の紹介
	40-②	男	×/? (夫は新規参入)	妻が果樹をしたくて移住し、研修先が同じだった	60代	60-①	男	○/?	(不明)
	40-③	男	○/×	サークル的な集まり		60-②	女	○/○ (妻の実家は新規参入)	農業と関係ないところ
	40-④	男	○/×	大学		60-③	男	○/○	高校の同級生
	40-⑤	男	○/○	農業近代ゼミナール		60-④	男	○/×	(不明)
	40-⑥	女	○/○ (農業・農機具販売兼業)						

- ・60代では、夫婦ともに就農する専業経営が多い。一方、30代～50代では、夫婦の一方が農業以外に従事する兼業が多く見られた。特に30代では、男性が農業以外で就労し、妻が農業を行うスタイルがみられた。
- ・女性の就農の選択を見ると、60代は嫁ぎ先だから就農したとの回答が見られた。一方、50代以下では、自分の志向で就農する傾向にあった。
- ・経営規模については、年代による違いは、必ずしも明瞭ではなかった。
- ・生産作目については、50～60代では、米のウエイトが比較的高いように見えるのに対し、30～40代は果樹が多く、米は中心とならない傾向にあった。

以上のことは、次を意味するとみられた。

- ①60代以上では、「農家に嫁いだ女性は農業に従事する」という役割規範に従った行動がうかがえた。これに対し、より若い世代は、自分の志向に依存した就農選択が行われていた。こうした動きは、女性だけでなく、30代では男性の行動にもうかがえた。すなわち、役割規範は後退し、職業選択の自由度は増しているといえる。
- ②この結果、60代では、専業経営が多いのに対し、それ以下の世代では、ワンマン（正しく

表2 選択された農業経営の形態

	農家番号	回答者	Q3.専業・兼業の別	Q4.夫の農業従事	Q5.妻の農業従事	Q6.経営規模	Q7.主要作目		農家番号	回答者	Q3.専業・兼業の別	Q4.夫の農業従事	Q5.妻の農業従事	Q6.経営規模	Q7.主要作目
30代	30-①	男	兼業	○	×	水稲45ha、リンゴ2.5ha、桃1ha	果樹(りんご、桃)、米少し	50代	50-①	男	兼業	○	×	水稲22ha、枝豆7ha	米、枝豆、セリ、ホウレンソウ、ブドウ、カボチャ、トウモロコシ
	30-②	女	兼業	×	○	1ha	りんご		50-②	男	兼業	○	×	ハウス13棟程	米、果樹(親がメイン)→野菜に転換
	30-③	女	兼業	×	○	リンゴ15ha、ブルーベリー450本、ラズベリー410本	りんご、栗を農園で、ブルーベリーラズベリーを個人で		50-③	男	兼業	○	×	15ha	米
40代	40-①	男	兼業	○	×	ハウス2a、路地5a、ミニハウス2.8a	きゅうり、ホウレンソウ		50-④	男	専業	○	○	イチゴ(夏400坪、冬300坪)、田18丁歩	いちご、米
	40-②	男	兼業	○	×	畑2ha(リンゴ0.7ha,0.6ha)	リンゴ、もも	60代	60-①	男	専業	○	○	50～60ha	米、そば、りんご
	40-③	男	兼業	○	○	ハウス(1棟に1作物のイメージ)	イチゴ、ユリ、米、きのこ、ホウレンソウ、ブドウ(イチゴとよきのは専用ハ)		60-②	女	兼業	×	○	田・畑計2ha(リンゴ0.4ha、桃0.2ha)	リンゴ、米、そば
	40-④	男	兼業	○	×	牛(繁殖30、肥育45)水稲2.6ha、たばこ1.1ha	畜産、たばこ		60-③	男	専業	○	○	2ha	桃、リンゴ
	40-⑤	男	兼業	○	○	6ha	米、トマト、アスパラ		60-④	男	専業	○	○	ユリ6～7万本 トルコ2500本 他2～3万本	ユリ
	40-⑥	女	兼業	○	○	ハウス3棟(1棟が大玉トマト、2棟ミニ)	トマト、冬に葉物少し								

は、ワンマン+支援体制)による営農スタイルが増える傾向がうかがえる

③作目の選択においては、50～60代以上では既存作物である米が選択されるが、30～40代では米にこだわらず、多品目を選択する傾向が見られる。

### 3) 農業に対する考え方

次に、農業に対する考え方として、Q8. 農業のイメージ、Q9. 農業をする理由、Q10. 農業の大変なところ・いやなところ、Q11. 農業の楽しいところ、Q12. 農業を職業として勧めたいかを整理した。ここでは、次の傾向がみられた(表3)。

- ・農業のイメージとして、30代で「楽しそう」がみられ、40代以上では「つらそう」「特になんとも思っていない」が多い。
- ・農業をする理由として、30代では「農業自体をやりたい」とする意見があり、40代以上では「家を継ぐ」との返答が見られた。
- ・農業の大変なところ・いやなところとして、農繁期があることや、収入の不安定性等が指摘されたが、年代による違いは明瞭ではなかった。
- ・農業の楽しいところとして、全世代で、人に縛られず自分でできること、育てる喜びがあることが指摘された。また、30～40代では、お客に喜んでもらえることが指摘された。
- ・年代を問わず、多くの人が農業を人に勧めたいとする。しかし50～60代の一部では、農業への就労を勧めないとする人もいた。

以上のことは、次を意味するとみられた。

- ①農業を自ら選択する傾向のある30代では、「たのしそう」とする農業感がみられ、今後はこうした傾向が強まる可能性がある。
- ②「たのしそう」とする背景として、自分が行うという主体的関与や、育てる喜びという生物生産の側面がうかがえる。同時に、若手世代は、「お客を喜ばせたい」という回答もみられ、営農の目的が自らの収入確保をはじめとした利己的なものだけでなく、利他的側面も意識される傾向もみられる。
- ③営農者の多くは、世代を問わず「農業を職業として勧めたい」との意識があり、離農の多発と相反するような意識形成が見られる。

表3 農業に対する考え方

世代	性別	Q8.農業に対するイメージ	Q9.なぜ農業をやっているのか(やっていないのか)	Q10.農業の大変なところ、嫌なところ	Q11.農業の楽しいところ	Q12.農業を職業として勧めたいか
30代	30-① 男	楽しそう。農業の楽しさは知っている	農業をやりたいと思っ ている	収入、売上の維持(楽し さが減っていきたくない)	自己責任で何でもできる	○
	30-② 女	観光農園が楽しんでいる感 上がっている。楽しそう	観光農園を存続させたい	見栄目に見えるが置かれず いるところ。最初は農業 販路が確立した	マイペースにできる、男 が付き。動物はしゃべらな いし	○ (やり方次第)
	30-③ 女	イメージは時になかった	手伝っていた農園のリンゴ を親戚に送ったからおし とされたから	資金が安い、力仕事	お客さんに喜んでもらえ る。おもしろいときは楽 しい	○
40代	40-① 男	強制的に手伝われて、無 理やり雇い入れた。	楽しそうに働いている人 を見て、補助金もあった(家 業は親とは完全に分離)	バリエーションに乏しい。農業 を無難にする人、風習があ り、ボクシングな人が少な い。交流機会が少ない	自分で考えて行動できる。 人に縛られない、生き物へ の愛情がわく。作物はうそ をつかない	○
	40-② 男	どうも感じかわらな かった。つたよりも時間が ない	孫婿して子供も生まれて字 に職をつけなくてはけな いと思った(資格もない、 自己完結できる仕事)	作業が大変。JAや出荷先と の付き合い、電話、メール が大変。夜は遅く、朝は早 い	品質、所得など数字で測 った分が現れ、差がつく	○
	40-③ 男	寂そう。スローライフ、気 楽そう。人との関わりが増 えた	家を継ぐ	家を継ぐ	お客さんの反応	○
	40-④ 男	特になし	家を継ぐ	雇用がかかる。どうして も、やらなければならない ところがある。	やればやれば成順に現 れる。時間をやりやすい	○(やる気があれ ば手伝う)
	40-⑤ 男	特になし	家でやっていたから	最初は面白くなかった。収 入が高い。	いい先輩と出会って楽し くなった	○ (やり方次第)
	40-⑥ 女	遊びに行く感じで手伝っ ているという感覚はなかった	農業の手伝いが楽し かった。おいしいと思った	虫、雑草、薬の調整がい や	お客さんに喜んでもらえ る。選んでもらえる。次 継ぎも考えるとき	
50代	50-① 男	小さい時から手伝いなどし ていて特に考えたことはな かった	家を継ぐ	家を継ぐ	作業時期がかかる大変。 人手が不足。固定資産の補 償がないへん	よいじり楽しい。あれも これもやりたい
	50-② 男	家が農家だから	家を継ぐ	家を継ぐ	物になし。	やり方を考えられる。やり ようなどにもなる。子 供達が食べられる
	50-③ 男	(不明)	会社員だったが、自分 でやってみたくて農家に転 身した	特別なことはない。仕事 が1時期に集中する	楽しい。お金になる。自分 で計画を立てられる	○ (本気なら)
	50-④ 男	きつい。飽きないと思っ ていた。子供が大きくなるに つれて農業になろうという 気持ちが大きくなった	決まった給料ではつまら ない。可能性が大きい。子供の 活動に時間がかかる	多に収入がないため要に ないといかない。厚生年 金がかからない(農業年 金)。作業が集中する	収穫。子供と一緒にい られる。自分のペースで できる。上下関係や時間に 縛りが無い	△(やめた方がいい かも)
	60-① 男	(以前は、冬は出稼ぎに 行っていたが、今はスキー で楽しむ)	規模をもてばご飯は食べ られる。サラリーマンは面白 くない	人材育成(機械を使える 人の育成など)ができてい ない	やればやるほど収入につ ながる	○
	60-② 女	嫁さんが農家だったから	嫁さんが農家だったから	嫁さんが農家だったから	嫁さんが農家だったから	自分で作ったものが実 てお金ももらえる。作物 を通して多くの人に出 会える
60代	60-③ 男	手間はしていたのでそ んなに変わらない、外で働 くなら	選挙で落ちて、職があ りたから	ネスド、熊、豚、鶏など	収穫が楽しい。作業が 楽しい	○
	60-④ 男	好きでやってきた	子供が多くなったのがき っかけ	天候、気象条件、農業	花ができた時、うれしい。	×(サラリーマン を勧めたい)

### 4) 家庭内の意思決定・その他

最後に、家庭内での意思決定の在り方、その他について、Q13. 家庭内の意思決定、Q14. サラリーマンと農家の違い、及び自由意見を整理した(表4)。

- ・家庭内での意思決定は、夫婦共同、もしくは分担、がほとんどであった。ただし、50～60代では、夫が農業・妻が子育てとするケースがみられた。親世代が主導権をもつとしたのは60代の一事例であった。
- ・サラリーマンとの違いとして、自営業としての自由度や自発性を好感触でとらえる指摘が年代を問わず多かった。
- ・その他の意見として、特に30～40代で、（ワンマンのため）コンパクトなスタイルにして売り上げを上げる、一つの職業に絞る必要はない、女性が働きやすいと成功しやすい、やりたいことがどんどん増える等、前向きな意見がみられた。

以上のことは、次を意味するとみられた。

- ① 営農の意思決定には、親世代は介入しておらず、特に若手世代では夫婦にまかされている。ここでは、夫は農業、妻は子育てという役割分業意識もみられない。
- ② 若手世代では、家の役割規範から解放され、高い活動の自由度を享受している。これが、農業の喜びにつながっている。

表4. 家庭内での意思決定の在り方、その他

農家番号	回答者	Q13.家庭内での意思決定	Q14.サラリーマンと農家の違い	自由意見
30代	30-① 男	相談しながら	農業は自由。ストレスがない。家族でそらってごはんが食べられる	複合化し夏場の収入を得たい。コンパクトにしつつ売り上げを維持したい。リンゴの販路を開業圏より先に広げたい。地域差・品質の差で差別化をしたい。
	30-② 女	忙しいときはできる方。各自。今は共働きが多いからどちらからかでは無理	収入のタイミングが違う。	1つに職業を絞る必要はないと思っている
	30-③ 女	ほぼ自分。最終的な決定は夫。加工のことは自分	給料が毎月入る。休みの取り方。労働時間が決まっている	一世代前から、リンゴジュースなどの加工がおこなわれている。
40代	40-① 男	妻がいないと成立しない(機嫌を損ねないようにする)	全部自分が、好きなことだから時間関係なくでも大丈夫。サラリーマンは我慢強くなったり常識を身に着ける上ではよかった	女性が働きやすい環境だと成功しやすい。管理作業を手伝ってもらうため地域の人と仲良くなる必要がある。若い人の意見を取り込むことが必要。楽しそうな姿を見せることが重要
	40-② 男	相談しながら。栽培のことは基本自分。作業のことは両親とも相談。	経営者かどうか。農業では自覚と責任が必要。	HPでも販売をするようになった。妻は子育てと結婚の関係が大変だった
	40-③ 男	夫妻半々	サラリーマンは給料が上がらない。農業は自由度が高い。今では、売り上げに対する保険がある	子供がいるとやる気がでる。子供のころは農業をしようとは考えていなかったが社会人になった1年間で考え始めた
	40-④ 男	自然と分かれている	サラリーマンは土日がある。農業では冬場に少し時間ができる	
	40-⑤ 男	妻が強め	農業では、時間`の融通がきく	昔は親戚などが集まって手伝ってくれていた。
	40-⑥ 女	妻。しかし夫の協力があってこそ	自分の時間を作りやすい。他の人と同じ空間を共有できる。学校のボランティアなどに行きやすい	楽しいことが多く、やりたいことがどんどん増える。それなりに稼げている。3Kのイメージを変えたい。
50代	50-① 男	各自	収入のタイミングが違う	税も兼業だったため初めは兼業をしていたが法人化して専業になった。
	50-② 男	相談はするが妻は子育て中心。農業は夫が決定。	農業は自分次第で自由ができる。子供の送迎が容易	暮らせるくらい収入を得るのが難しい。都会から来ても収入が少なく暮らせない人も多い。やりたいと思っている人でないと続かない。サポートが必要。
	50-③ 男	妻に関心ながら判断。役割分担している。	サラリーマンはやりたいことがすぐできない。農家はすぐできるし他人に誇られない	息子も今年から手伝い。効率を上げるため水稲は直播と移植を併用している。以前は、冬にはアルバイトをしていた
	50-④ 男	お互いを理解している。お互い。	自分たちのペースでできる。ただし、自分で動かさないといけない。ボーナスがない。天気に勝てない	好きな気持ちがないと続けられない。苦労は絶えない。妻の力が大きい。
	60-① 男	一緒に考える。	やり方によってはいい生活ができる。自分でやるか頼まれてやるか、時間が自由。迎えに行きやすい。冬に避んでいられる	息子が手伝ってくれている。パソコンも使えるようにならないといけない。農産物は、総合会社に販売している
	60-② 女	夫が主導権。	農業は、自分次第でどういでもできる	
	60-③ 男	夫妻半々。	農業は、頑張れば頑張るほど成果が得られる。自主的に取り組み、労働時間が決まっていけない	新規就農は増えているが法人への就職が多い。自営する人がいない。
	60-④ 男	農業は夫、子育ては妻	農業は自由度が高いが、ハイリスクハイリターンと感じる	無花粉のユリを栽培。

#### 4. 考察：農業者の意識と営農スタイル

今回の調査・分析から、農業者の、農業に対する意識は転換が進んでいることがうかがえる。従来の農業は、地域や家族のもとでの役割規範により営まれてきた。しかし、今回の調査では、50～60代では、「農家の嫁は労働力」といった役割規範がみられるが、30～40代では、「個々人の志向の下で選ばれた農業」という傾向が強まる。このことは、世代間での経験や成長による差というよりも、時代環境による変化として捉えられよう。農業の担い手の形成は、役割規範を離れて個人の選択によるものとなる。同様に、継承を前提とする営農意識もさらに弱まるとみられる。

こうした意識の変化に伴い、農業のスタイルも転換がすすむ。農業は自己実現の場であり、営農形態として「ワンマン+支援体制」が増えるだろう。夫婦で別の職に就くことは、農業からの期待所得を低下させ、農業継続の経済的ハードルの引き下げにつながる。経営継承を前提としないことで、単世代・ワンマン型のコンパクトな農場が志向されるように思われる。こうした動きをリードするのは、若手農業者、特に女性農業者であり、彼らの設計する農村の在り方を探求することが、今後重要となるとみられる。